

安田雷洲の没年及び画業について

内田 洸(サントリー美術館)

安田雷洲は、19世紀の江戸で活躍した洋風画家である。名を尚義、俗称を貞吉・後に茂平とあらため、蘭名を Willem van Leiden という。身分は御家人で、安政3年(1856)には下級役人である小普請であったことが明らかにされている。はじめ葛飾北斎に入門し、その後洋風画家の道を選び、天保年間には「蘭画」の描き手として知られるようになった(『広益諸家人名録』)。一般には銅版画家としての知名度が高く、「東海道五十三駅」(町田市立国際版画美術館蔵など)や「江戸近国風景」(神戸市立博物館蔵)などの作品や地震図といった新しい主題の銅版画を制作し、日本銅版画を創製した司馬江漢(1747～1818)、松平定信の御用をつとめた亜欧堂田善(1748～1822)に続く人物とされる。また、洋風の肉筆画も描き、聖書の「羊飼いの礼拝」挿絵を原図とする「赤穂義士報讐図」(本間美術館蔵)など舶載洋書の挿絵に基づいた作品や明末清初の奇想派の画風を想起させるような山水図を描いた。

安田雷洲の研究は銅版画史を中心に進められ、近年には河野実氏によって作品と研究史がまとめられた。生没年が不詳であったため、その活躍期は、年記のある作品の存在より文化11年(1814)から安政5年(1858)と考えられてきた。本発表では、町田市立国際版画美術館経由で得た安田家のご子孫の情報より雷洲の没年を報告する。安田家の菩提寺につたわる過去帳の記述により雷洲安田茂平は安政6年(1859)に亡くなったことが明らかになった。現存する作品の中で最も遅い制作年代であった「富士箱根眺望図」(安政5年着賛、歸空庵蔵)とも齟齬はない。生年は、おおよそ明和7年(1770)から安永9年(1780)頃となろう。

没年が明らかになり、また、河野実氏の研究以降、新たに見出だされた作品も複数あるため、本発表では雷洲の経歴や作品、作画を行った範囲などの再検討を行う。北斎門下時代の文化期、洋風画家を志した文政期、洋風画家として名をあげた天保期、晩年の弘化・嘉永・安政期、雷洲はどのように彩管を揮ったのか、その実像をさぐってゆきたい。

また、「足羽先生堤安藤文澤雪行図」(埼玉県立文書館蔵)などこれまでの研究では言及の少なかった作例を取り上げ、その特徴や蘭学ネットワークを考察する。「足羽先生堤安藤文澤雪行図」は、四谷に住んだ鳥羽藩医安藤文澤(1807～1872)が、足羽と号した蘭方医三代小室元長(1764～1854)に贈ったものであることが、元長の記録よりわかっている。雷洲は、四谷に住んでいたが、安藤文澤も同じく四谷に住んでおり、二人には日常的な交流があっただろう。この他、四谷近辺には銅版画で「西洋戦闘図」を制作した本多玉岡(?～1865)なども住んでおり、いわば「四谷ネットワーク」とも呼べるような蘭学者の交流が想定できる。